

最終講義「新聞は死なない」

H23・2・10

田島 暁

▽ 「もうなくなる」と

- ・ 危機状況——広告減、部数減、夕刊やめ、競争より共存へのなだれ、インターネット圧力、電子新聞も 米欧の苦況
- ・ 革命期か＝一県一紙化、CTSに続く大変化・革命、「存亡」まで問われて
- ・ 衰勢、経営難→廃刊、淘汰・合併再編あるかも

▽ だが、新聞メディアは「死なない」「消えない」「消してはならない」

＝代わるメディアなし

- ・ 正確公正な情報→使命感（真実追究、後世への歴史記録）、多重チェック機能
- ・ 取材網、取材力
- ・ 調査報道
- ・ 役割→権力監視、言論報道自由の砦、戦前戦中の轍踏まず
- ・ 常識の物差し→判断指標、社会正義、弱者の側
- ・ 特性＝一覧性、「世界・今」を掌握、軽便、宅配
- ・ 紙も電子も

▽ 老記者の心配＝このままでは大変じゃ

- ・ つまらない紙面、記事
 - ＝大活字化で、大味・薄味化 1、5倍で、3分の2に
 - ＝短く狭い視点（歴史観・世界観）、刹那的、単純、幼児化、狂う判断
 - ＝筆力落ち
- ・ 草食職場＝静か（パソコンに向かい）、覇気乏し
- ・ 国、国民のことも

▽ 楽しい晩年をありがとう

- ・ メディア講座8年
- ・ 母校よ

お盆です。遠く近々セミの声を聞きながら、亡き人のことがしばしばあります。沈思するうち、とげとげしい世の姿と、そうさせている精神のありようも思われます。

NHKラジオの「夏休み子ども科
学電話相談」。甲子園大会でお休み
になる前、昆虫や魚、植物、天文な
どの質問に交じって、小一の坊やが
こんなことを聞いたのでした。

「心は、なんで人間の目に見えな
いんですか」

回答する先生たちが「オー」と声
を上げました。二十三年目を迎えた
好番組での、出色の質問です。脳科
学や文章、絵でも心は見えるよ、と
説明されましたが、どうも坊やの問
いの深さの方が印象的でした。

なんで心は見えないの

坊やが「見えない」と言っ心、見
えたらいいと思っ心は、だれのどん
な心かな。あらゆる人の一切の思い
や考えなのかな。幼い胸にきざした

説

社

察して見よう人の心

週のはじめに考える

疑問をいとおし、思い、精神の営み
を始めた芽よ、だんましく健やかに
育ちなさいと。そう祈りながら、あ
らためて考えさせられたものです。

心とは、知性(知識・感情・意
思)の混然としたものか。その深
浅、広狭またさまさま。海より深く

大空より広い心もありましょう。心
の内は、言葉や行動で表に出ること
もあれば、じっと抱き

秘め続けられる心も。
表れにくい心は、しり
さや恥、苦痛、悲しみ、
思惑、打算、計略、負の
目、恐怖心などでしょう

か。

六十余年間、かたくなに閉ざして
きた心の扉を開く人がこのとき増
えました。戦争を体験した兵士や市
民です。沖縄の、広島、長崎の、大
陸や南方戦線の、地獄図を証言する
人々。先夜のテレビは「硫黄島玉碎

戦」の実相を日本の生還兵の証言で
再現していました。

「心は、しりさ、理不尽さを」と

見えなかった心がそのように見え
ることがある。晩年、靖国参拝をや
めた昭和天皇もそのわけを漏らして
「それが私の心だ」と。逝去前年の
言葉だったと云います。

参拝は心の問題でない
「靖国参拝は心の問題だ」と小泉
首相が言います。精神の自由だ、他

人が干渉すべきではない、とも。
そつだ、と思われがち、例に
よって分かりやすい語句です。でも
どうか。心の問題とは言えないの
では。戦没者を悼む思いは「心」で
も、参拝の行動となると別ではない
でしょうか。心には立ち入れません
が、歴然と表れた行動は他者の批評
対象にならざるを得ない。

まして国の最高指導者、責任者た
る首相は一挙一動を注視されるので
す。靖国への「参拝」は、己のブラ
イバシ、だといった感覚で干渉を
望むわけにはいかない。

家族や同胞、国に殉じた戦没者へ
の感謝、哀悼は自然な心です。その
純心から靖国に参る人が多いのも、
成り行きではありません。オレもその
一人と首相は思っのか。

戦争遂行の支柱だった
靖国には行かない人が少
なくありませんが、靖国
が単に戦没者を祀る神社
ならまだしも、戦争指導
者たち(A級戦犯)まで

合祀したことで靖国観は変質し参拝
がさだにためらわれるのです。
侵略、玉碎、自決、死ね、と民に
まで叫び立てた指導者にも頭を垂れ
ることになる。そんな靖国参拝とな
り、昭和天皇さえ遠ざかりました。

「中国侵略は軍国主義者による。
日本国民は被害者」と考えることに
して日本との国交を正常化した中国

にとつて、日本の現首相が戦争指導
者たちにまで「哀悼の誠を込めず」
のは耐え難く、国交の名分も立たな
いと思っのは不思議でない。

日本に占領され、辛酸をなめさせ
られたアジアの国々が首相の靖国参
拝を日本国民以上に厳しく見詰
め、参拝をやめてほしいと願う。そのア
ジアの心を軽んじる心、「干渉する
な」と理由も察せずにはい、国
際的な目には狭量、独善としか映ら
ないかもしれせん。

心を、心で見ると大切さ
目に見えない心を知りたい、知ら
なくてはいけない。そんな時は、目
でなく、心で見たらどうか。心で見
るとは、察することです。相手は、
あの人は何を思っ、なぜそう思っの
だろうと考えるのが大事。

自分の心を押し付けるばかりでな
く、相手の心を読み、分かり合える
中間点を見つければ、紛争も事件も
減って、世の中、うんと幸せになる
と思っますが、どうでしょう。

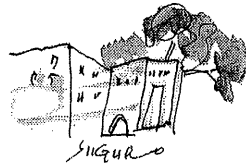
参拝は心の問題でない

「靖国参拝は心の問題だ」と小泉
首相が言います。精神の自由だ、他

人が干渉すべきではない、とも。
そつだ、と思われがち、例に
よって分かりやすい語句です。でも
どうか。心の問題とは言えないの
では。戦没者を悼む思いは「心」で
も、参拝の行動となると別ではない
でしょうか。心には立ち入れません
が、歴然と表れた行動は他者の批評
対象にならざるを得ない。

随 想

春 思



田 島 暁

中日新聞社
論説主幹

へ伊吹おろしの雪消えて 木曾
の流れに囁けば 光に満てる国原
の 春永劫に薫るかな……

旧制第八高等学校（八高）の寮
歌「伊吹おろし」の一番である。
琵琶湖の東、滋賀・岐阜県境の
霊峰伊吹山（一、二七七メートル）
は、木曾・長良・揖斐の三川が育
んだ濃尾平野とその東南端の名古
屋から、ささぎるものなく望める。
冬、北西の季節風はまさに伊吹

から一気に吹き下りて、この地を
震え上がらせる。東海道新幹線や
名神高速道が関ヶ原でマヒするの
は「伊吹おろしの雪」のせいだ。
広大な風下には伊勢湾に臨む三
重県四日市市もある。その浜辺で
転地療養していた山口誓子は昭和
十九年十一月、名句を詠んだ。
「海に出て

木枯帰るところなし」

伊吹おろしのさま、その威をう
たつて雄大である。湾から真つす
ぐ太平洋へ出て戻らぬ寒風。

「まるで片道のガソリンを積ん
だ特攻機そっくりである。私は特
攻機を悼むころを木枯に託し
た」と誓子は書いた。神風特攻の
開始から一か月後の吟だった。

さて、そんな伊吹おろしが収ま
れば、この地には春来るだ。八高
寮歌もその喜びとともに六番まで
抒情、高踏の青春を歌いつなく。

旧制八高が名古屋に生まれたの
は明治四十一年だった。戦後は新
制名古屋大の教養部になるのだ
が、地元には昔から、八高と名大
の「遅い誕生」に釈然としない思
いがあるようだ。

「なぜ八番目の高校だったのか。
名古屋帝国大も、七帝大最後の設
置だったし……」

名古屋の市勢、人口、地利など
からすれば、もっと早くに開校し
ていてもよかつたはず、と素朴に
首をひねる人が少なくない。

東京の一高、仙台の二高、京都
の三高、金沢の四高、熊本の高
がそろって（前身は）明治十九年
生まれ。岡山の六高は三十三年。
鹿児島の高は三十四年で、その
七年後にやつと八高である。

旧帝大も、一校時代に続き明治
三十年に東京、京都両帝大制とな
った後、四十年に東北、四十三年
九州、大正七年北海道、昭和六年
大阪に設置。名古屋は戦雲急の十
四年まで待たされた。植民地の京
城帝大、台北帝大より後である。

「売り込みを好まず黙って力を
蓄える地味な土地柄が、名古屋飛
ばしを招いたのでは」「尾張徳川
の地に明治の薩長藩閥政府は冷た
かつた」など、一種屈折した説も
くすぶり続けたわけで……。
でも、そんな解釈に帰していい
のか、と少し調べてみると――。

旧制一―五高は、全国を五区に
分けて計五校設けられた高等中学
校が前身。この時名古屋は、乱暴
にも東京中心の第一区に含まれて
しまった。思えばこれが不運。六
高誕生を見て「名古屋に七高を」
と運動を起すが鹿児島に敗れ、
歯ざしりするのである。

帝大も、東北が建築費献納など
で先行でき、九州、北海道はそれ
ぞれ京都、東北帝大の一部が独立
する形をとれたので早かつた。

名古屋では、愛知医専の大学昇
格とその官立移管が地元の第一目
標となつた。そして愛知医大を母
体に総合大学化を、と大正末期か
ら国に迫る。市や県、代議士、財
界も建議と陳情を重ねた。日中戦
争に突っ込み、中京の重化学工業
が頼りとなつたころ、愛知県の建
築費、土地寄付もあつてようやく
名古屋帝大は生まれたのだった。

高等教育機関の誘致に名古屋が
下手ではあつても不熱心だったの
ではない。政府や全国がどうも名
古屋を軽んじたフシはある。

だから今、愛知万博を準備しな
がら、愛知県人は気をもむのだ。

徳川親藩ながら幕府とあつれき
もあつた尾張。その江戸、明治以
降の平坦ならぬ道を思い、五輪誘
致でソウルに敗れた因も数えつづ
「もつと当地に、当地のやること
に関心を寄せてもらえまいか」と
願ひ切なこの春である。